

## 学校と家庭の生活指導

「貧困」問題に苦しむ地域・学校からの  
発信

橋 本 尚 典

## 分科会第一日目

## 今子どもたちをめぐる状況は

年を追うごとに拡がっている「格差社会」。今、子どもたちの生活は、子どもゆえに大人の想像を超えた厳しい生活現実がある。毎日の朝食さえ十分に摂れない、電話が使えない、電気も止められがちといった大変な生活にも現れているが、それぞれの生活を守るゆえに、友達関係がうまく結べない、自分以外の他者が一緒の生活をつくっていく仲間として認められないといった関係性の「貧困」をも生み出していることに私たちは注目していかなければいけない。

1 小学校からのレポート（義務制 高校との共同の  
t r ぼー都分析）

「格差社会」という言葉が使われて久しい。しかし、この言葉を、必要としない社会への展望はいつまでも見えないでいる。一方で「格差」は子どもたちの社会へも拡大している。分科会の冒頭で檜山のNさんのレポートをもとに、子どもたちの中に拡がる「貧困」の実相を出しあつた。

檜山のNさんのレポートは、貧困にあえぐ一家庭の少年に援助をし続けたNさん自身の記録である。少年は貧困故のネグレクト状態、父母離婚という経験をする中で、Nさんは「自分は何ができるのであろうか」という葛藤をしつつ、いつも寄り添い話しの聞き手になっていた。

やがて、彼も青年に成長し、女性と巡り会い、結婚をし、幸せな家庭を築いていると思っていたら、結婚相手の親に、一生懸命に貯めてきたお金をとられ田上に離婚をし、この先の展望もないまま故郷に帰ってきて、Nさんと酒を酌み交わすという今の社会状況のもとで、「貧困」故に社会から排除されていくというレポートというよりも一人の人間の物語である。

参加者からは、自分の地域の実態が出され、北海道の地方を覆う「貧困」が経済的なものだけでなく、制度の「貧

困」教育政策の「貧困」、文化の「貧困」その影響が多岐にわたって拡大し、そのことが子ども同士の関係性の「貧困」＝自分以外の他者を認識できない。

よって、学級や学校の子どもたちも意図的な指導をしていかなないと、共同の関係を結べないことになっているという実態と、私たちの地域の教育実践の課題が自ずと見えてくる。

胆振からは、高校の養護教諭数人で高校生対象のアンケートをもとにした報告があった。

そこに浮かび上がってきた高校生達は、自己肯定感が低く、未来への希望がないまま、現代社会を覆う表面の文化に流されている子どもたちであった。（詳細は発表者の希望によって掲載しないが）

こういった子どもたちの前で、教育行政は、こういった対応をしているだろうか？今大きく私たちに要求していることは、「学力」問題であり、校長の権限を強化し、「研修」を多く強いることであって、私たち教員に求めていることは、目の前の子どもたちの幸せを追求するための決して豊かな教育自薦ではない。この面からも子どもたちの幸せを子どもたちとともに追究していくこと、豊かな文化を創造していくことの重要性を訴えたい。

## 2 義務制と高校合同のレポート検討

西野 誠

札幌の中学校のHさんのレポート

様々な生活指導上の課題を抱えた学校の中には「だめなものはだめ」という常識的な指導観がある。しかし、それは生徒達の現実生活の脈絡とはかけ離れていく。

その一方で「大人の指導に素直に従う」と権威に無条件に従う生徒の感覚と相まう、「だめなものはだめ」という指導は民主主義の危機を感じる。

それとHさん実践は真つ正面から対峙していく。登場する生徒達は発達障害、ネグレクト、「よいこ」演じ、発達課題を背負う兄弟の姿を見ての他者への攻撃性など、様々な課題をみせる。Hさんはそれらの生徒と級友の出来事を、仲間と意識させることを大きなねらいとし、討論・討議とリーダー指導の場ととらえている。

たとえば、小学校からの申し送りには特別な診断がないが実は特別支援が必要な男子がいる。最終的にはHさんと保護者が、障害者として社会に認知される未来設計をふくめた、特別支援教育への進路設計を共同の課題にする。そこに、至るまでの彼と級友達の対話と学びがのびやかだ。

Hさんは級友にその子の世界をレクチャーする

「例えば、チャイムなつたから教室入れよ」と言う、「遊ぼう」と言っているようにとらえる、そういう感じかな」

「人には色々な人がいるって」

「自分やみんなと少し違うと考えれば良いし、色々な人と協力したり、仲良くすることって大切にしてほしいと思うのだけだ」

「困って助けてと言ったら助ければ良いし、じゃ、なかったら手出しする必要ないよ」

そのHさんの呼びかけにこたえ、女子の中にはキャンブのなかで、遊ばせながらつたわせつつ、楽しむフォロワーが生まれていく。

今の女子世界の中では、今時珍しく、物静かで、絵が好きで「友人がいない」と思われている女子が、からかいの対象となる。

その子のフォロワーを巡り、Hさんはリーダー候補に学級を分析させ、その分析に基づいて指導を展開する。

学級にそのトラブルを話すべきか・否かの微妙な判断や、「よい子」演技をする子へのアプローチの時機を待ったりと、子どもたちの微妙な力関係を、リーダー達と共に分析し個別の課題に応じた指導を展開させていく。

実生活に関わる課題を子どもたちと対話し、学び、呼びかけに応え、仲間集団をリードするリーダー達をそだてる

スタンスこそ民主主義を世代間で共同し、育てるものではないか。

### 3 分科会二日目〔高校の実践〕

尾張〇〇〇

(1) 「今、美明高校がおもしろい」仲間と創る感動の共有」  
は、学年担任団の年度方針として「感動のあるクラス・学年・学校」をかかげ、見学旅行にとりくんだ実践である。生徒の実行委員会が「見学旅行の目的」から話し合い、服装や小遣いの額などの「心得」について話し合いをかさね、「楽しい見学旅行。しかしそれは難しいこと」という合意をつくっていった。

当日は京都のタクシープランによるポイントラリーなどの工夫のほか、東京では平和学習として、作家の早乙女勝元氏を招いての東京大空襲に関する講演会を企画している。また、クラスになじめないB子をめぐる周囲の生徒と担任のかかわりも報告された。

報告者は「今回の見学旅行はいろいろな仕掛けができた」「教師集団がそれぞれの立場でできることを実践し感動ある学校づくりを」と結んでいる。

(2) 「生徒会による服装・頭髪改善の取り組み」自主・自立

の学校を目指して」は、一九九七年に生徒会が七年にわたるとりくみをへて「服装自由化宣言」を採択し、二〇〇二年から生徒・父母・教職員による「PSP懇談会」とりくんできた富良野高校で、茶髪・化粧・「なんちゃって制服」（他校の制服を着崩す）がひろがり、地域からの批判が噴出したことに対して、校長が「自主・自立を問い直す」ことを提案したことに端を発するダイナミックな学校づくりである。

校長の提案に対して職員会議では賛否両論、さまざま議論が行われたうえで、「生徒たちの壁になろう」という意思統一のもと、①来年度から制服を導入する（私服の禁止）②服装・頭髮規定は教員がつくる③生徒会が対案を示した場合を検討することを決定し、校長が全校集会で説明する。生徒会は動き出した。

生徒会執行部は①「服装自由化宣言」を守る②自分たちでルールを作り自分たちで守る。という方針を決定し、生徒会長が全校放送や生徒会通信で呼びかけ、アンケートやHさんR討議を重ね、二日間、六時間におよぶ評議会で「制服は導入するが普段の学校生活では私服を認める」「自分たちでルールをつくる」ことなどを生徒会の改善策としてまとめ校長に提出した。

生徒会改善策の試行結果をPTA役員会、職員会議で

検証し、二〇一〇年度は改善策が正式に導入された。

報告者は「この実践はまだ緒に就いたばかり」と総括している。ルールを具体的にどう定めるか？点検をどうするか？などの課題とともに、生徒同士の人間関係が希薄になっていくだけに、クラス討議を深めることは難しかった。「だからこそ、生徒同士つながる実践を粘り強く積み重ねていくことこそ、今の教育に必要ではないか。」という報告者のまとめに、これからも難題にとりくむ決意を感じた。

(3) 唯一、私学から報告された「ねらいを持ったHさんRづくりー二年A組の今までとこれから」は、教師になつて二年目の報告者が、「人とのつながりを大切にしよう」というクラス目標をかかげ、「そこからぶれない」決意のもとでとりくんだ実践である。

不登校になった二人の女子生徒との丁寧なかかわり。「やんちゃメンバー」から煙たがられるU男とメンバーの中心的な存在であるM男が学校祭のバンド演奏を通じてぶつかりながらも信頼を築いていく姿を「最高に面白かった」と振り返っている。

報告者は「女子はメールで、男子は力関係で」つながる人間関係の中で我慢できない生徒が出てきたとき、「生

徒に対するねらいがしつかりたてられていれば、落ち込んだりぶれたりすることは少なくなるだろう」と総括している。若い報告者の決意が伝わりと同時に、それを支えてきた職場の同僚の姿が垣間見えた。

(4) 「私はいつも劣等感を抱えています〜ひとりの『優等生』との世界観をめぐる対話」は、大学に進学し生き方を問うてくる卒業生との、メールを通じての膨大なやりとりを綴ったユニークな報告である。

高校時代、「優等生」で学校の「看板娘」的な存在だった「まる」は、報告者との対話を通じて平和学を学ぶことをめざす。そして大学の先生からの「競争から降りろ」という助言や報告者の「優等生にならなくていい」との言葉を受け止めながら、日本の教育問題、国家論、知識人論と関心を広げていく。しかし、平和を学ぶほど、将来に対する不安がつのり、「私はいつも劣等感を抱えています」「私には働く勇気がない」ことを問いかけてくる。その問いに何とか答えようとしてきた報告者との関係を「まる」自身が「社会が嫌いで、居場所がない」と思っていた私を広い世界に解放してくれた」と語っている。

(5) 別の場所で報告されたこの「劣等感」のメールも紹介しながら、「考えよう！子どもをとりまく危機の現実」との報告を行ったのは高校の退職教員である。

教師は子どもを不幸のどん底に突き落としている現実社会に怒りを燃やすべきである。そのうえで、子どもたちと共に感じ、ともに苦悩する中から、教師自身が高まる」と報告者は述べている。現役の教師・父母・生徒への励ましとして受け止めたい。

### 分科会二日目〔高校の実践〕

(1) 「今、美唄高校がおもしろい！仲間と創る感動の共有」は、学年担任団の年度方針として「感動のあるクラス・学年・学校」をかかげ、見学旅行にとりくんだ実践である。生徒の実行委員会が「見学旅行の目的」から話し合い、服装や小遣いの額などの「心得」について話し合いをかさね、「楽しい見学旅行。しかしそれは難しいこと」という合意をつくっていった。

当日は京都のタクシープランによるポイントラリーなどの工夫のほか、東京では平和学習として、作家の早乙女勝元氏を招いての東京大空襲に関する講演会を企画している。また、クラスになじめないB子をめぐる周囲の生徒と担任のかかわりも報告された。

報告者は「今回の見学旅行はいろいろな仕掛けができた」「教師集団がそれぞれの立場でできることを実践し感動ある学校づくりを」と結んでいる。

(2) 「生徒会による服装・頭髪改善の取り組み」自主・自立の学校を目指しては、一九九七年に生徒会が七年にわたるとりくみをへて「服装自由化宣言」を採択し、二〇〇二年から生徒・父母・教職員による「PSP懇談会」にとりくんできた富良野高校で、茶髪・化粧・「なんちゃって制服」（他校の制服を着崩す）がひろがり、地域からの批判が噴出したことに対して、校長が「自主・自立を問い直す」ことを提案したことに端を発するダイナミックな学校づくりである。

校長の提案に対して職員会議では賛否両論、さまざま議論が行われたうえで、「生徒たちの壁になろう」という意思統一のもと、①来年度から制服を導入する（私服の禁止）②服装・頭髪規定は教員がつくる③生徒会が対案を示した場合を検討することを決定し、校長が全校集会以て説明する。生徒会は動き出した。

生徒会執行部は①「服装自由化宣言」を守る②自分たちでルールを作り自分たちで守る。という方針を決定し、生徒会長が全校放送や生徒会通信で呼びかけ、アンケート

トやHR討議を重ね、二日間、六時間におよぶ評議会で「制服は導入するが普段の学校生活では私服を認める」「自分たちでルールをつくる」ことなどを生徒会の改善策としてまとめ校長に提出した。

生徒会改善策の試行結果をPTA役員会、職員会議で検証し、二〇一〇年度は改善策が正式に導入された。

報告者は「この実践はまだ緒に就いたばかり」と総括している。ルールを具体的にどう定めるか？点検をどうするか？などの課題とともに、生徒同士の人間関係が希薄になっていくだけに、クラス討議を深めることは難しかった。「だからこそ、生徒同士つながる実践を粘り強く積み重ねていくことこそ、今の教育に必要なことではないか。」という報告者のまとめに、これからも難題にとりくむ決意を感じた。

(3) 唯一、私学から報告された「ねらいを持ったHRづくり」二年A組の今までとこれから」は、教師になって二年目の報告者が、「人とのつながりを大切にしよう」というクラス目標をかかげ、「そこからぶれない」決意のもとでとりくんだ実践である。

不登校になった二人の女子生徒との丁寧なかかわり。「やんちゃメンバー」から煙たがられるJ男とメンバー

の中心的な存在であるM男が学校祭のバンド演奏を通じてぶつかりながらも信頼を築いていく姿を「最高に面白かった」と振り返っている。

報告者は「女子はメールで、男子は力関係で」つながる人間関係の中で我慢できない生徒が出てきたとき、「生徒に対するねらいがしっかりとられていれば、落ち込んだりぶれたりすることは少なくなるだろう」と総括している。若い報告者の決意が伝わりると同時に、それを支えてきた職場の同僚の姿が垣間見えた。

(4) 「私はいつも劣等感を抱えています。ひとりの『優等生』との世界観をめぐる対話」は、大学に進学し生き方を問うてくる卒業生との、メールを通じての膨大なやりとりを綴ったユニークな報告である。

高校時代、「優等生」で学校の「看板娘」的な存在だった「まる」は、報告者との対話を通じて平和学を学ぶことをめざす。そして大学の先生からの「競争から降りろ」という助言や報告者の「優等生にならなくていい」との言葉を受け止めながら、日本の教育問題、国家論、知識人論と関心を広げていく。しかし、平和を学ぶほど、将来に対する不安がつのり、「私はいつも劣等感を抱えています」「私には働く勇気がない」ことを問いかけて

くる。その問いに何とか答えようとしてきた報告者との関係を「まる」自身が「社会が嫌いで、居場所がないと思っていた私を広い世界に解放してくれた」と語っている。

(5) 別の場所で報告されたこの「劣等感」のメールも紹介しながら、「考えよう！子どもをとりまく危機の現実」との報告を行ったのは高校の退職教員である。

教師は子どもを不幸のどん底に突き落としている現実社会に怒りを燃やすべきである。そのうえで、子どもたちと共に感じ、ともに苦悩する中から、教師自身が高まる。報告者は述べている。現役の教師・父母・生徒への励ましとして受け止めたい。